洛友會会報

京都市左京区吉田本町
京都大学工学部
電気系教室内
洛友会

ご挨拶

洛友会会長　松田長三郎

時は今、天高く気清く、沈思黙考の絶好の好期であります、会員の皆様方のご健康を切にお祈り申し上げます。

今日は、少し古いことを書かせて頂きましょう。私が助教授の頃、文部省から在外研究員を命ぜられ、独英米三ケ国は派遣されましたのは、昭和6年で、当時はまだ飛行便が無かったので、船便によるか、シベリヤ鉄道によるか、或は米国経由の外はありませんでした。私は昭和6年11月26日、神戸出帆の郵船靖国丸で渡欧したのですが、12月31日の朝、フランスのマルセーユに着き、パリに急行、三菱商事の瀬川支店長殿の歓迎を受け、同夜パリを出発、昭和7年の元日の早朝、多年あこがれのベルリンのフリードリッヒ・ストラーセの駅に安着しました。元日の早朝でありますので、同地在留の友人達には知らせずに到着、駅前のタクシーに、ベルリン第一のホテルへと頼みましたら、ホテル、アドロンと云うのに案内されました。在伯林の日本大使館の新年宴会に招かれた席上、大使から、どこにお泊りですかと尋ねられ、ホテル・アドロンと答えましたら、あそこは、大使とか大会社の社長達の泊まられる所ですと云はれた。大学の助教授の若造の泊まられる所ではありませんとでも云うようなお話でした。当時ドイツは不景気のドン底でありましたので、ホテルの大食堂は私一人、まるで東洋のプリンスのように待遇されましたので、多少心附けをはずまねばなりませんでした。当時住友商事の伯林支店長格の竹内様の配慮を得て、ホフマン夫人夫人宅にお世話になることになりました。当時、普通は、一ケ月の下宿料は、大体50～60マークでありましたが、そこは150マークと破格に高い所でありましたが、上品な寡婦住いでありました。ここから伯林大学の外人科へ3ケ月通って、会話学習しました。また冬のシーズンでありましたので、大学や高校の舞踏会など盛んでありましたので、会話練習のつもりで、つとめてそんな所へ、タキシードに着替えて出かけて行きました。私の研究の目的地は、南独のバーデン州の首都カールスルーエでありましたが、約3ケ月間、そういふ状態で会話のけい古をやって後、カールスルーエに行きました。日本人は私一人でありましたが、後に、セメント常務の笠井康一氏ご夫妻がお見えになり、時々日本料理のお手料理のごちそうになりました。当時、世界的に有名な保養温泉場の、仮装コンクールで笠井夫人の和装姿が、第一位になり、大いに面目を施こしたことは、楽しい思い出であります。その時の一等の賞品が応接室用のセットでありました。二等になりましたのは、篭一杯のウイスキーやぶどう酒などでありましたが、二等になった新婚の若夫妻から、賞品を取り替えてくれませんかとの申し出でを喜こんで受け入れ、これを周囲の人達に大盤振る舞いをして喜こばれたことも、今は楽しい思い出の一コマでありますが、当の笠井ご夫妻は、今はこの世にいまさぬ方々で、懐旧の情に堪えません。

交通、通信機関の発達の結果、世界は益々狭く、我等の活躍の場は愈々広くなって来ました。会員諸君のご健康を重ねてお祈り申し上げます。

（終）

電算化第2版
洛友会名簿
11月末日発送

お願い!!会員各位に配達された名簿が万一〝局留置〟になったときは、お手数でも留置期間内に指定郵便局にてお受取りください。

詳細に関しては〝事務局だより〟をご参照ください。

電気系教室だより

対阪大交歓スポーツ大会

恒例の対阪大交歓スポーツ大会が、七月六日（土）午後、京大で開催されました。前日来の雨模様で、一時は開催も危ぶまれましたが、昼頃から雨も上り、予定通り阪大西原教授以下の一行も一時過ぎに到着され開会のはこびになりました。電気総合館大講義室で開会式が行われ、教室主任林教授から歓迎の辞が述べられた後、各競技ごとに競技場所に向いました。しかし残念ながら吉田グランドで行われる予定の野球とソフトボールは、グランド状態不良のためボーリングに変更され、上賀茂のMKボウルで行われました。その他の競技はバレーボールと卓球が体育館、テニスは関電コートで予定通り行われました。各競技の成績は次の通りです。

バレーボール　阪大2－1京大
卓球　京大2－1阪大
テニス　阪大5－4京大
ボーリング（野球）　京大1365－1324阪大

ボーリング（ソフト）阪大1026—1016京大

以上のように今年度は総合成績3—2で阪大が勝利をおさめました。競技終了後、北部生協二階ホクトで阪大側滑川、西原両教授以下約六〇名、京大側林、田丸、上田三教室主任、安陪各教授以下約五〇名が出席して、懇親会が催されました。安陪教授の司会により開会の辞、乾杯の後林教授より各競技の勝利監督に優勝杯が授与されました。引き続いて、勝利監督と敗北監督の弁、敢闘選手（勿論女性！）の紹介、先生方のスピーチ、歌などがあり、胃袋のふくらむにつれて宴会も盛り上り、予定の二時間余がまたたく間に過ぎ、七時すぎに散会しました。

教官の移動

前号のお知らせ以降、次のような異動がありました。

松山　隆司　昭和60年8月1日、電気工学第二教室（長尾研）助手より東北大学工学部助教授に昇任（昭和49年電子工学科卒）

藤田　茂夫　昭和60年8月16日電気工学教室（佐々木研）助教授より、同教授（放電工学講座）に昇任（昭和41年電気工学第二学科卒）

高岡　寛　昭和60年8月16日電子工学教室（高木研）助手より、イオン工学実験施設助教授に昇任（昭和49年電子工学科卒）

総会、支部だより

昭和六十年度 中国支部総会

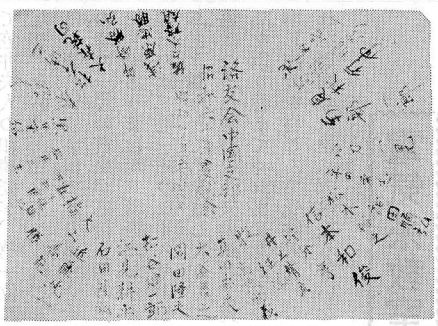
洛友会中国支部では、昭和六十年度支部総会を五月二十八日、広島グランドホテルで開催しました。

本部からは、御多忙の中を大谷・岡田両先生においで頂きました。

総会は松谷支部長のあいさつに始まり、五十九年度会計報告と六十年度予算が満場一致で承認された後、大谷・岡田両先生から本部および教室の近況をお聞きし、とどこおりなく総会を終わりました。

引き続いて懇親会に入り、エレクトーンの演奏をバックに、京都に因んだ歌のヒットパレードを会員が入れ替わり、立ち替り合唱し、また学生時代の思い出話に時間がたつのも忘れるなどして楽しいひとときを過しました。

（佐々木記）



東北支部総会報告

洛友会東北支部総会は6月15日（土）午後5時より仙台共済会館で開催されました。

盛岡より川守田氏（昭8年卒）をはじめとして、8名の御出席を得て、支部長のご挨拶につづいて、会計報告が承認され、議事は滞りなく終了しました。

引続き懇親会に入りコンピュータの話から地球物理学など広い視野からの話題が続発し、楽しい一時を過ごし、午後8時に散会しました。

収支決算報告（自昭和59年4月1日　至昭和60年3月）

収入の部		支出の部		
交付金	12,500	事業費	81,754	
広告掲載料	10,000	総会費		64,704
支部会費	17,500	雑費		17,050
利息	1,693	事務費	6,330	
総会会費	55,000	印刷代		1,200
前年度繰越金	63,966	通信費		5,130
合計	160,659	次年度繰越金	72,575	
		合計	160,659	

なお、仙台市在住の河野仁氏（大正10年卒）は昭和59年10月17日、長岡市在住の八百枝清氏（大正15年卒）は昭和60年2月7日に御逝去されました。　以上。

中国支部碁会だより

七月十三日（土）長かった梅雨明けの午後、同好の士がベルサロンに集合。ここは本多会長が主宰される通信技術者のオアシス・碁のセットが置かれていることに目をつけ、会場とした次第。本多会長の六段は別格としても有段者もズラリ？「そのうち他流試合も」と初めての試みにしては盛り上った大会でした。何分忙しい人も多く、遅刻・早退は自由、「四時間のあいだに出来るだけ多く対局し、勝数の多い順位とする」というルール・若手の板倉氏（昭四六）の四勝一敗は立派なものだが、若干ハンディが甘かったとは敗者のボヤキ。本多会長は二勝一敗の後、早々と優勝確定の板倉氏に賞品授与の後退席された。

遅刻の大野副会長（昭二五）はジックリ型、二局しかこなせず、しかし唯一人優勝者を倒したとあって敢斗賞。

大会後、同ビル地下レストランにおいてビールで乾杯。本多会長古田氏（昭六）など長老と板倉氏のような若手が共に楽しめる囲碁、すっかり定着したゴルフ会ともども中部支部の定例行事にしようと再会を誓った。（石川記）

同窓会便り

昭16・3卒共振会 44周年浜松大会報告

昭和56年5月京都での40周年大会の申合わせにより、昨夏以来準備を進め、関東班は永安幹事他数名がコースと会場設営に、関西班は小林幹事が記念アルバム第3号（第1号は卒業時、第2号は25周年時）の発行への万般の世話を担当した。因みに本会の名称は卒業式前に鳥養先生のご命名になり、全員の気持が共振により最大効果を顕わすことを念願し命名された由。（深海氏談）

昭60・5・24（金）13時新幹線浜松駅のコンコースに馳せ参じた級友28名（夫人同伴13組、単身参加者15名）は久濶を叙し話題沸騰、13時半出発、大型バスで航空自衛隊浜松南基地を見学、エレクトロニクスの塊とも言える航空電子機器の進展に瞠目し一部実演を見学する。夕刻宿泊先たる浜松グランドホテルに到着。部屋割少憩の後七時より宴会が開かれたが、永安・河辺両幹事氏各室訪問で浴衣に着換の暇もない忙しさ。各自前回以来の状況をPRする。

熱血の学歌を謳ふ宴五月

座談中小林幹事のアルバム編集と発送の苦心談が披露された。今回のアルバムは出席の有無に拘らず、全員が夫婦と家族の写真を3月末迄に提出し、本会の十日位前に各家庭へ配布が完了し、素晴しい出来栄えの感動を抱きつつ集ったのである。ご揮毫を賜った恩師松田・羽村両先生に厚く御礼申上げる。

翌25日（土）7時半朝食、8時半バスにて龍ケ岩洞（りゅうがしどう）（鐘乳洞）見学、降雨のため循環コースができず、滝の如き落下水のところで引返す。次に臨済宗龍潭寺（りょうたんじ）に参詣、井伊直弼菩提寺としての寺宝拝観、池畔のつつじが雨に洗われすがすがしい。

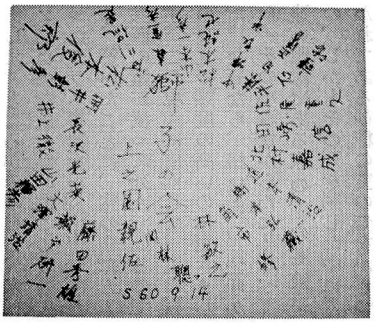
「梵音」と鐘楼の額雨後の寺

引続き新居関所址の見学をし、案内の老女の講釈興味津々なるも時間余裕なく辞去する。弁天島の料亭「浜せい（はませい）」にてお別れ昼食会。聞けば関西風の鰻料理法との事。浜松駅にて、3年後の再会を約し、惜別の念やみ難く解散した。走り梅雨の中の観光も一掬の趣きあり。私共の入学時先生方との初対面式のあった階段教室も春雨の中であったのと一脈相通ずるのか。関東班のご配慮と、諸幹事氏のご尽力で東西の中点で催されたのが奏効し、最高の出席率で盛大裡に終えられたことを深謝する。（写真は一同の記念撮影）

（永安・岡本記）

卒業16周年同窓会（獅子の会）報告

8月14日（土）、卒業して四四（4×4）16年目に我々昭和44年卒業及び46年修士修了者の第2回



同窓会が、藤田秀雄君（リコー）他7名が幹事となって東京青山の健保会館で行われた。

当時の教室主任であられた上之園親佐名誉教授を御迎えして、同期生25名が参加した。上之園先生の御挨拶等の後、自由歓談に花が咲いた。各自の近況紹介に移り、大学院には絶対に受からないと言われて受かった者や、五つ以上の会社を渡り歩いた者、弁護士、公認会計士達の隠された思い出話が続いた。多くの者が、卒業時に主任の先生方が仰っしゃったことの洞察に改めて感心させられた。最後に、大学に残っている松木純也君より先生方の近況が紹介された。第3回は20周年を京都にて開催することを約して散会した。

（昭和44年卒　橋本記）

会員寄稿

蟻の新殲滅法（実施例）

昭和七年電気工学科卒　国本貞三

□昨年の夏のこと、私は庭で小さな一つの生物現象に、偶然に出会ったことが動機となって、これに多少の工夫を凝らして、或事柄について、誰にでも容易に利用できる有用で便利な一つの方法を見付けました。小さな事柄ではありますが、そのメカニズムが興味深くもあり、実用上にも役にたつ智識ともなりますので、お話しさせて頂きたく存じます。

事は害虫の蟻についてのことなのです。大量の蟻を能率よく、連続してかつ、自動的に、確実に捕捉し、捉えた蟻は一匹も逃がさず全部死滅させてしまう強力な方法であります。しかも経費は殆どかかりません。そうして毒物などは一切使用しない安全な方法なのであります。

□その夏も暑さの厳しい日々がつづきました。そのような季節には、畳の上に蟻がよく上ってきて、時には食卓や人の手足を這ったりして、不愉快な思いをさせられました。これを捕えようとすれば、素速く逃げまわり、物があればその下へ逃げ込み、まことにうるさいものです。このうるさくて腹だたしい蟻をば沢山捉えて、殲滅する方法を、適当な工夫を加えて、見付出したのです。しかし、この強力な方法を見付け出すのについては、それに先立って基礎となるもう一つの特性（蟻の）を蟻がもっていると云う重要な事実を見付けたのであります。しかしそのお話はあとまわしにしまして、実際に多数の蟻を捉えて死滅させる具体的な方法はついて先に説明しましょう。

□それでは具体的な蟻殲滅法は次の通りです。先ずコーヒ茶椀に一杯程の水に中白の砂糖を小匙に五杯程を入れ、これを煮て、濃い砂糖の蜜を作ります。これをビールを飲むカップ又はそのような形のガラス容器に入れて、蟻のよく通る庭のどこか適当なところにおきます。（容器の形は皿形では駄目です。これは重要な条件です。その理由は、あとで述べます。）そうして一時間も経過しますと、多分、その中には五～六匹の蟻が入っているでしょう。一日間も放置しておけば砂糖の蜜はその水面から深さの半分どころまで、約五十匹程の蟻の死体が漬っているでしょう。更にもう二日間程そのまま放置しますと、砂糖の蜜は、水面から底まで、蟻の死体がぎっしりつまっているでしょう。このようにして、多数の蟻を殲滅することができるのです。

不思議なことがありました。この装置を三個おいておりましたが、四日間経過したとき、そのうちの一個が、中に入っていた砂糖の蜜も、蟻の死体も、すっかり無くなっているのです。これは、野鳥が飛んで来て、それを喰べたのではないかと私は思っています。こんな不思議なことが二度ありました。この原因を確かめないうちに夏が去って、蟻が居なくなってしまいました。もう一度実験を繰りかえしたいものと思っています。

□次にこの方法の基礎となったもう一つの発見について述べましょう。

約二年程前に、ブドウ酒が色々と名前をつけられて、各社から売り出されたことがありました。そんなブドウ酒を、私も勧められて、買いましたが、どれも甘くなく、私の口にあわないので、飲まずに、そのままになっておりました。それを甘くして飲んで見ようと思って、私はブドウ酒に砂糖を直接入れましたところ、砂糖はブドウ酒に溶けにくく、ブドウ酒は甘くなりませんでした。そこで、私は水に砂糖を入れて、それを煮て砂糖の蜜を作り、これをブドウ酒に加えてまぜました。するとブドウ酒は甘くなり、おいしく頂くことができました。そのときに余った砂糖の蜜をガラス容器に入れたまま茶簞子にしまいこんでおきました。ところがその翌日、私はブドウ酒を飲むためにこの蜜の入ったガラス容器を取り出したとき、驚いたことに、蜜の中に五～六匹の蟻が漬って死んでいるのです。この現象に直面して、私は蟻の嗅覚の感度の高いのに驚きました。なぜなら、蟻は庭の地面から、その小さなからだにくらべて遠い距離にある家の中の茶簞子の、しかもその戸を閉じた中に置かれてある砂糖の蜜の匂をかぎつけて、そこに辿りついているのだからです。それも一匹でなく数匹なのですから、これは蟻というものは、どの蟻も素晴しく鋭敏な嗅覚をもっていると判断してよいことを示す現象であるとみなすことができます。私は蟻のこの不思議な特性を利用すれば、多くの蟻を捕えて死滅させることが出来ると判断して、実験をした訳であります。（この実験装置に集ってきた蟻は体長一センチ程の、足の速い黒い蟻した。）

さて、先に私は皿は駄目だと申しました。それは蜜をなめに来た蟻が危険を感じて、あとすざりするとき皿ならば傾斜がゆるいので逃ることができますが、ビールを飲むカップならば、蟻があとすざりしようにも、ウシロは蟻にとっては切り立った断崖絶壁にも等しいし、そして蟻の足には蜜がつい

ていて足が滑って、逃れることができないからです。蟻のような小さな虫は水面におくと、水の表面張力のために、沈まないのが普通ですが、砂糖で作った蜜に触れると蟻は濡れて蜜に吸いよせられて、その中に潰ってしまうようです。

□　次にこの蟻殲滅法を実験した結果はうるさい蟻が殆ど居なくなったほかにどのような効果があったかについて述べます。（昭和六十年八月中頃までの情況）実験は先にも述べました体長約一センチの黒い蟻に対して行いました。実験の規模は装置三個を½メートルの間隔をおいて蟻のよく通るところにおき、そのまま四日間放置しました。装置のガラス容器の寸法は底の直経約七センチ、上面の直経八センチ、深さ九センチです。著しい効果はたとえば次のようなものがあります。

①桜の木に今年に毛虫が全くつかなかった。

②しだれ梅の木にも今年は全く害虫がつかず、すくすくと若い枝をのばし、健康な若葉を多くつけた。

③モミヂの木に今年はイラムシやミノムシがつかなかった。

このように蟻が居ないと庭木が元気になるのは蟻が直接にも間接にも樹木に害を及ぼしているようです。

④毎年初夏になると一度か二度晩になると縁の下から多数の羽根蟻が入って来て、家の中に這いまわったり、飛びまわって大困りをしますが、今年はそのことがなかった。

このように非常に効果がありました。蟻でお困りの方は一度お試しになっては如何かがでございましょうか。

（をわり）

回想六十二年抜萃

講大正14年卒　吉田寛一

私は大正12年3月卒業した大阪府立今宮工業学校の推せんで京都の㈱奥村電機商会（当時、東京の芝浦、大阪の川北、京都奥村がわが国の代表電機メーカーであった）へ入社、工業部の設計課へ勤務することになった。入社後2ケ月程過ぎた頃、当時の世相から労働運動が京都でも盛んになり、遂に奥村電機もその火中に入って仕舞った。8月になったが、会社の争議は連日行われている。私は5月発表の逓試（電気事業主任技術者資格検定試験）の一次試験に合格していたので8月の第二次試験受験のため一週間程会社を欠勤（許可をとって）した。

その間に心配していた労働争議が最高潮に達したらしい。私は二次試験（京都帝大内の大教場で施行）も済み、9月1日定刻出勤した。労働争議は納まっていた。

やがて河原武設計課長が出社され「君、電報を見て来たの！」と言はれた。私は深い意味がわからんままに「否」と申し上げた。暫らくして上野七夫工業部長から呼ばれた本館二階の会議室へ案内された。河原課長も一緒に来てくれた。

上野部長は突然『今度君に会社をやめてもらう事になったので、これに署名して下さい』と言われた。私は突差に『どうしてやめなければいけないのですか』上野部長『今度は新しい人にやめてもらう事になったんです』私はそこで考へついたので『新しい人は私の他にも居られますが、その中からどうして私がやめねばならないことになったんですか。私の会社の先輩が第二工場の責任者で居られますが、この人は私達、後輩が今回の労働争議に無関係であるよう心配してくれましたし、この先輩も自分から進んで争議に参加するような人ではないのです。私達の学校卒業者は何誰もが労働運動をやるんだ等と思はれては困ります。尚から特に申しあげておきます。もし、私がやめなければならなくなったとしても、今後も私は電気関係の途を進まねばならんと思いますから、私に勤務上、何か悪いところがあれば何卒教えて下さい』と一息に言った。（時に私は満16才、家族と離れて只一人、これから先どうすればよいのか、身体の震えるのが押へられなかった。おそらく顔もまっ青であっただろう）。

暫くして上野部長は『君は電気工学講習所へ行くらしいがここではこれは困るんだ』私『そうですか、大阪の学校では奥村電機では諒解されているとのことであったんですが』と素直に言った。その時、傍から河原課長が『吉田君、これに署名しなさい』と無感情で言はれた。私は直ぐ『ハイ』と言って万年筆で退職願に署名した。上野七夫工業部長は引換へに退職金を置いて退席された。河原課長と二人だけになった。『君これからどうするんだ』と尋ねてくれた。心配してくれている気持ちが伝わって来ている。私は『仕方がないから大阪へ帰ります』『君大阪へ帰っても家の人達が心配されるだけだろう。よかったら暫らく僕の家へ来ないか』と言ってくれた。（僅か三、四ケ月しか仕えていない私にとっては意外な有難いお言葉である。全く世間を知らない自分ではあるがまさに感謝感激である。）引続き『大阪へ帰っても仕方がないだろう、決心がついたら荷物を纏めて今日のうちに僕の家へ来なさい。道順はこの通りだ』と。（なんと有難いことか、!!この事を後日、老母に話したら「渡る世間に鬼はなし」とはよお言ふたもんやのう）と心から感謝してくれた。

決心のついたのは正午には少し間があったが、半ばやけくそで会社の大食堂へ行った。食事を始めようとした時、忘れる事の出来ない、大地震（大正12年9月1日午前11時58分。関東大地震）が起った。辺りの人達は皆驚いて外へ走り出たが、私は只一人、ゆっくりと食事を済ました、代金を払ふにも受取る係も外へ逃げ出してしまって居ないと言う有様である。

二ケ月余り世話になった下宿へ戻り、主人に事情を説明したところ、それでは荷車が必要だろうと隣りの理髪店へ朔日の休みで遊びに来ていた若い元気な百姓さんを頼んで来てくれた下宿の主人も非常によくしてくれ。

行先は田中大堰町の河原邸である。午後三時頃漸やく準備完了、

吉祥院村からどれ位の距離が知らないが出発した。熱い夏の京都の街をジグザグに進む荷車の後押しをし乍ら一生懸命歩いた。東本願寺の前の日影で休憩した事と途中、氷店で小休止したことだけが記憶に残っている。目的地へ着いた時は太陽も大分傾いていた。玄関前へ荷物（柳行李と机とふとん）を降して河原さんの帰って来られるのを待っていた。

いつもより早く帰へって呉れたらしい河原様は、とりあえず荷物を内へ入れ、直ぐ一緒に外出しようと言われ、和服に着替へながら、これは設計課一同からの餞別だよと言って五十銭銀貨を一握り渡された、思いがけないことだった。自分も急いで和服に着替えた。

外は夕暗に包まれていた。河原様のお供は初めてだ。脚の早いのに驚いた。随いて行くのに骨が折れた。殊にその頃の京都の市街には石ころが点在していて暗がりでは思うように早やく歩けない。大分歩いたと思った。後日考へてみると岡崎公円の慶流橋の際の〝パラダイス〟であった。ここは奥村電機の発祥の地で、吉祥院村へ移った跡地である。向い側に奥村電機副社長堀鹿造氏の邸宅があった。

私には生れて初めて見る「ショー」の舞台であったが、それよりも河原様が私を慰めて下さってゐる勿体ないお心づかいにもその時は気付かなかった。9時過ぎに「ショー」が終り、帰路についた。途中、熊野神社から少し離れた所の店で氷水をご馳走になった。

田中大堰町の河原邸は新築の二階建で、自分は玄関脇の一室を頂いた。

食事は毎朝、河原様にお供して、百万遍の傍の入船亭（松村）と言う学生食堂へ通った。常連になると銘々の名前を書いた箸箱を棚の上に列べておき一般客との区別をしていた。

河原様に帰宅後も毎晩遅くまで机に向はれた。私はお願いして昼間の自分の仕事を作って頂いた。それは河原様所蔵の書類の整理等であった。或る日玄関の戸の隙間から家の中へ三尺位もある蛇（青大将）が這入って来た、恐くて何とも出来なかった。帰宅された河原様に申し上げたら早速手頃な棒を持って、自転車の泥よけの中は長く潜んでいるのを見付けられ一撃のもとに青大将をダウンさせ、表のドブ川へ捨てられ、ホットしたことがあった。都会で育った自分には恐しいことであった。

河原様に保証人になって頂いて入学決定した電気工学講習所の開講の日も近付いて来た。河原様は私の為に私には何も言はずに、当時、京都市の電気部長で在られた大滝鼎四郎様（京都帝大電気第一回卒）へ吉田寛一の履歴書をもって、夏の暑い最中を紺の羽織に白足袋、麦わらのカンカン帽の正装で一度ならず足を運んで下さっていた。私に何も話されなかったが、以心伝心。私は勿体ない後ろ姿に心で合掌してお見送りしていた。

お蔭で講習所の新学期が始まる11月の前に、京都市役所電気部、電気課発電係（蹴上発電所隣）へ採用して頂けるようになった。ここには岡本豊三、木下仙路、三橋萬一、大角米吉、西村誠氏等々多数の講習所先輩がおられ、心強い限りであった。大正12年11月15日待望の電気工学講習所の新学期が始まった。

出席者は廊下に掲げられている名簿へ各自で出席のサインをすることになっていた。知人をさがすのに好都合であった。そこで私は大阪今工の先輩（第一回卒）中村楢次郎氏を見付けた。中村先輩は私が吉田聖一（今工第二回卒）の弟で今工の後輩（第七回卒）であることを直ぐに悟られ、私の希望を心よく聴いて下さった。先づ河原邸でお世話になっているが、京都市へ就職させて頂いた今日、成可く早く出るのが礼儀だと思っている旨、申上げたところ、それでは僕は今8畳の部屋に一人で居るんだが、僕と一緒でよければ来なさいと言って下さった。

河原様へ経過を申しあげた。賛成して下さったので、次の日曜日にと言ふことに決めて、新しく世話になる下宿先（銀閣寺町81、山本岩吉様方）へも挨拶を済ました。日曜日の朝は、知らぬ間に河原様が運送店から荷車を借りて来て下さった。積んだ荷物は少量であったが、私の曳く姿を哀れに思はれたのか、吉田山の坂を登り切るまで後押しをして下さった。申し訳なく思いつつ元気を出して銀閣寺町の下宿へ辿りつくことが出来た。その後下宿は聖護院西町へ移ったが河原様は数回訪問して下さった。

大正14年10月、京都市電気局へ勤務しながら無事に講習所を卒業出来た。早速河原様へ卒業証書を持参した。河原様は我が事のように喜んで下さった。（明治40年12月生れの私は卒業生中最年少であった。）関野先生は長野県立工業学校へ推せんして下さっていたが、逓試社創業のため上京することとなった。

逓試社では電気工学研究雑誌月刊「逓試」の編集発行に従事した。当時逓試の検定委員、青柳栄司先生、石川芳次郎先生始め先輩村井貞三氏、笹田助三郎氏等、多くの同窓から数々のご支援を頂いた。又関野先生のご配慮により「電気評論」の創始者司城正木先生（京大電気明治44年卒）から絶えず、雑誌編集等につきご指導を頂いたことは誠に有難い事であった。

その後河原様は日立製作所へ入社され電気機関車の開発を担当。上京され、代々木富ケ谷町に新居を構えられた。奥様も実に立派なお方で、邸が広いからとのお話で、私の実弟服部光久（東京帝大農学部学）の学友上西君を下宿させてもらったりしたこと等を覚えている。

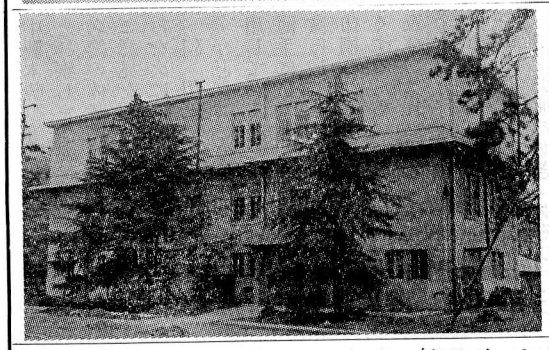
私は軍事召集で昭和16年夏満洲国へ、又昭和18年から比律賓へ出征した。

昭和21年12月比島から復員して来た時、河原家は東京には無く消息を知る事が出来なかった。城の崎のご出身であることは記憶にあったが。自分が社会へ出る時受けた大恩は忘れられない。暫らくして洛友会名簿で既に故人になって居られる事を知ったが以来30余年何とかしてご家族の動静を知り、お墓参り等させて頂きたいものと念願し続けて来た。

☆今年は関東大震災以来62年目である。

ヒマラヤ杉のつぶやき ②

講昭和13年卒　竹村　清



"思い出"を語るということは、楽しいようでうら淋しいものだ。前号にわたし達の記憶をたどりつつ、電気工学講習所の校舎がとり毀されるところまで書いた。この思い出の中で校舎が最初は2階でその後3階に増築された年代が不明であったが、大正年代の卒業生の方から、そのそれぞれの年代の二種類の写真が掲載されている電気工学講習所旧同窓会会報を拝借した。

この写真をじっと眺めていると自分達の若かりし日のことがまざまざとタイムトンネルをくぐりぬけて現実のものとなってくる。写真の一つは昭和7年発行の会報に掲載されていたものでこれは2階建のものだ。しかし2階建は昭和2年までこれ以後3階に改築されている。この三階建の写真の掲載されている会報は昭和11年発行のものだ。

この間わずか8年しか経っていないのによくも自分達はこうも成長したものと感無量である。

思い出に浸るのもこれ位にして話を現実に引きもどそう。そうそうあれは、今から13年前の昭和47年春の頃であった。

その頃はもう4階建の工学部情報工学科教室は、堂々たる偉容をもって完成していた。この偉容の前には我々は身すぼらしく感じられ恥かしい思いをしたものだった。

これからの話の都合上前掲の電気工学講習所の写真に写っている我々ヒマラヤ杉に名前を付けておこう。

校舎に向って右(西寄)をA杉、左(東寄)をB杉と呼ぶこととする。A杉とB杉とは前出の二枚の写真を比較してみると昭和2年頃に同じ大きさの我々が、同時に植えられているのに昭和11年頃には、B杉の方がA杉より大きく、たくましくなって来ている。A杉はどこか体の具合でも悪いのかと気になっていた。　(以下次号)

事務局だより

電算化名簿第2版の発行について

1、はじめに(追憶と共に)

洛友会の行事として最大のものの一つである洛友会名簿の電算化第2版が、かねて予告のとおりいよいよ本年11月末日に発送されることになりました。

ご承知のとおり本名簿の電算化第1版が昭和58年末に発行されてから2年が経過しました。

この当時は、電算化編集の第一回目でもあり、これらに対する要領が充分に呑み込めていないこともあり、テンヤワンヤの結果、努力した割にはミスの多い出来ばえのない内容のものとなり、編集担当者ととしましては汗顔の至りでした。

発送後ミスのご指摘やら、ご叱責、はたまた激励など多くの会員の方からお便りをいただき、編集子としましても次回こそは、と捲土重来を心に誓ったことが、ついこの間のように思い出されます。

あれから二年、会費払込時の訂正、お葉書や電話、同窓会幹事の方からの一括してのご連絡などこの二年間に一千通を越える修正、変更のお便りをいただきました。

これらの方々には紙面を借りまして厚く御礼申し上げます。また、昭和60年1月第130号会報にも記載しましたように、勤務先は判明している会員で居所不明者を所属会社に問合わせた際、該会社の人事又は勤労部のご担当者にお掛けしましたご迷惑並びにご回答に対するご厚情に対し、心から御礼申し上げます。

以上のような経緯をもちまして、第2版が発行されるに際し、今回発行名簿の改良点や発送対象時期方法並びにおわびなど記載しまして会員各位のご参考に供したいと存じます。

2、改良点について

改良点としましては、これを大別しますと

1、本文関係

2、体裁関係

の二項目に分類されます。本文関係におきましては、

1,1　会員索引に関するもの

前回発行時に最も苦情、ご叱責の多かったのがこの索引に対するものでありました。すなわち、常用漢字と旧漢字が同じ読み方で、なぜ同列同順位に並べてないのか。同じ文字が飛び飛びになっていて引きにくい、例えば広田と廣田、沢村と澤村、斉藤と斎藤などで、この間の経緯については、昭和59年1月号126号に記載のとおりであります。

この対策としましては、当方から電子計算会社に同一文字として扱う常用漢字と旧漢字の一覧表を作成して改良させましたので、今回からは見易くなり、ご了解いただけるものと存じます。

1,2　会員勤務先別名簿に関するもの

次に苦情の多かったのが、題記に関するもので、本名簿中、会員が勤務される所属工場の記載がないため、会員の中には、折角会員

各位を勤務先別に分類しておきながら、この勤務先の工場、事業所名が記入されていないのは何故か、これでは本名簿の利用価値が半減どころか無いに等しいとまで厳しいお叱りを受けました。

この点に付きましても同会報126号にて報告したとおりであります。

以上の改訂を行うには、学校関係を除き一からやり直す必要があり、本名簿部分に記載されているほぼ全員約二千名近くの会員登録をやり直すという大事業になります。

幸いなことには、前述のようにこの二ケ年間に既に訂正させていただいた会員の方が約五〇〇件ほどありました。

それでも、この分だけで一千五百件ほどの訂正作業となりました。

ここでご留意願いたいのは、特にここ二～三年前の58、59、60年度卒業生で所属部署が空白になっている方は卒業時会社名のみご連絡になってその後、所属部署名のご連絡がない方です。これに対しては事務当局で、その後の追跡調査をすればよいのですが、会費振込時、又は、お葉書でもご連絡くださるようお願い致します。

3、体裁について

体裁関係に関しましては、会員中製本装幀等に興味をお持ちの方と拝察しますが、一部の方から本名簿の体裁につきましても貴重なご意見を頂戴いたしました。これらを次に列記いたします。

3,1　用紙について

今どき、このようなザラ紙を使用しているのは珍らしい？もっと薄手にして製本時の厚さと重量を減らしてはどうか。ただし、両面印刷のため印刷のため裏写りをなくするため、インク（黒）の明度及び、これに関連して紙質に留意すること、など印刷に関しては素人の編集子に対して得難いご意見をいただきました。

3,2　天地のあき（あそび）について

編集子が申すまでもなく、会員各位におかれましても索引欄や卒業年度別会員名簿欄及び勤務先別会員名簿欄をご覧になったとき、特に勤務先の箇所におきましては天地のあきが極めて少くなく、よくこれで断ち揃えの時に文字が切れなかったものだと感心？する位に狭まくなっています。

このことは第一回製本時に既に判明していたのですが、今更この時の不手際とその理由を申し述べるのも弁解になりますので、今回（第2版）発行時には改良するように致しました。この結果はご覧の際おわかりかと存じます。

3,3　卒業年度別会員名簿欄の上下横線を取り除くこと

このことも前述の会員からご指摘をうけました。

3,2項の天地のあそびを大きくするためには、この上下の横線をなくした方がもっと見やすく、かつ体裁が良くなるので取除いた方がよい。

以上のとおり、ご指摘又は、当方で気の付いた改良点につき申し述べました。出来ばえの如何については、会員各位のご批判、ご教示をお待ち致しております。

4、発送について

本名簿の発送につきましては、次の要領により行います。

4,1　対象について

名簿の発送対象者は、原則として59、60年度会費完納者と致します。ただし、59年度会費のみ納入者にも発送致しますので、60年度分会費を納入してくださるようお願い致します。

なお、名簿発送時60年11月30日以降に会費をお払込みの会員にも勿論後送致します。

以上の要領で発送致しますので、よろしくご協力の程お願い致します。

4,2　時期について

本名簿を利用して年賀状等をお書きになる場合を考慮して、前回までは12月10日頃に発送していたのを繰上げて11月30日に発送致します。大いにご利用願えれば幸甚です。

4,3　方法について

書籍小包便にて郵送致します。

5、おわび

今回の電算化第2版の改良点で、最も気になっていたのは、ご承知のように日本電信電話公社が民営に移管されて会社形態となり、これに伴う組織変更の内容が部外者には、よく判からなかったため、1,2項において述べた勤務先別の会社の所属工場（事業所）に相当する総支社関係特に本社機構の構成が明瞭でなかったので、この部署を編集子の独断で本社を関東総支社に分類した点であります。

このことは、もし総支社名を省略した場合は、前回名簿の時と同様に××局〇〇課のみ記載され、どの地域の××局なのか不明となります。

この点の改訂に関しましては、正式の職制が判明次第、事業所名の新規登録からやり直して訂正を致しますがこのことによりご本人並に会社に対してご迷惑をおかけしましたことを深くおわび申し上げます。

次にご了解願いたいのは、同じく日本電信電話株式会社に所属する武蔵野、横須賀、茨城、厚木の各電気通信研究所の名称の点であります。このことは、同社の改編に伴い名称が変更されると仄聞しておりましたが、新名簿改訂時期に間に合わなかったので、これも前者と同様判明次第新しく事業所登録から改訂致します。

特にお願いしたいのは、前述4研究所に所属の会員各位は、ご自分の研究所名及び所属部署等を葉書又は、会費払込時にご連絡ください。万一ご連絡のない場合は、旧研究所名にて登録されたままとなりますのでご留意下さい。

6、お願い

前号でもお願いしたように、名簿配達時に万一で不在のため〃局留置〃の連絡がありました時は、洛友会の経費節減のためご足労でもお受取りくださるよう重ねてお願い申し上げます。（竹村記）

訃報

講大11	玉谷浅太郎	38・3・1
〃	吉村　一義	60・5・21
講大12	久保田仁蔵	60・5・16
〃	山岸　基蔵	59
講大14	吐山　尚明	59・2・6
大15	青井桂一郎	60・7・26
昭4	谷口　正夫	60・6・17
昭5	田井　清	59・4・3
講昭5	姫野秀次郎	60・4・28
昭17	二ノ方兼武	60・7・12

以上の方々がご逝去なさいました。謹んで哀悼の意を表します。